

北海道大学森林空間機能学演習から

## 開拓以前の北海道における木の文化

ち 原 鴻 志

(北海道大学農学部森林科学科)

### はじめに

古くから樹木と暮らしてきた人類は「木の文化」とも言うべきものを作りあげてきた。北海道もまた前近代（開拓以前）からアイヌ民族やその祖先にあたる人々や和人が住んでおり、樹木を利用してきた。しかし、今日、開拓以前の北海道にどのような木の文化が存在していたかが意識されることはあまりない。

「北海道は異国？」という冗談は、こと木の文化に関しては冗談では済まされない。実は前近代の北海道では、本州以南とは異なる独自の木の文化が存在した。

本稿では、まず「木の文化」を便宜的に定義し、この「木の文化」の研究を行う意味と研究手法について述べる。次いで、従来「日本の木の文化」がどのように語られてきたかについて総括する。そのうえで「北海道の木の文化」の異質性を論じ、従来論じられてきた「日本の木の文化」とは様相を異にする北海道の木の文化の輪郭を浮き彫りにしたい。

### 木の文化をどう調べるか

本稿では、「木の文化」を「樹木からの物質生産機能に立脚した文化」と便宜的に定義する。

つまり、木の文化には木造建築や木製品の他にもアットゥシ（樹皮から繊維をとって作るアイヌの着物）などの木部以外の樹木を利用した製品も含まれることになる。さらに、それらを利用するための森林施業・木材加工などの技術や嗜好も「木の文化」とみなすことができる。

では、過去に存在した木の文化を復元する方法としてどのようなものがあるだろうか？

まず、過去の生活を体験した人に直接尋ねるという方法（民族（民俗）植物学）がある。民族植物学は樹木の利用に関する精緻な情報を得

ることができる一方で、せいぜい100年くらい（平成30年なら大正7年）しか時を遡る事が出来ないという欠点がある（湯本 2012）。

他に、過去の人が樹木の利用に関して書いた文献を解読するという方法（文献史学）もある。しかし、前近代の北海道に関する文献は、和人が書いたごく少数のものしか残っておらず、これだけで木の文化を復元するのは困難である。

さらに、過去の人が遺した木製品等のモノを直接分析するという考古学・文化財科学の方法がある。考古学というと土器や石器が連想されがちだが、低湿地遺跡では大量の木製品が出土している。考古学の特徴として、花粉分析や顕微鏡観察による木材の樹種同定などの科学分析が併用されていることが挙げられる。北海道のように史料が乏しい地域でも対象物さえあれば研究ができるという利点があり、開拓以前の北海道における木の文化を復元するには欠かせない手法になりうる。

また、木の文化を理解するためにはそれを成り立たせている木材や森林の性質を知る必要がある。そのためには森林科学の知見も欠かせない。

このように、木の文化の研究は人文科学と森林科学の両方を跨ぐことになり、必然的に、学際的にならざるを得ない。

### 「日本」の木文化-針葉樹文化

開拓以前の北海道の木文化について述べる前に日本の木の文化がどのように語られてきたのかについて触れたい。

小原二郎（1972）は、洋風の建物の内装や家具には広葉樹が使われているのに対し、和風の伝統的な建築には針葉樹材が使われていることを指摘した。このことから、西洋は広葉樹文化

であるのに対し、日本は針葉樹文化であると論じ、中でもヒノキが好んで用いられたとした。

また、林学者の遠山富太郎（1976）はスギに注目している。遠山は、コケラ板や桶、樽などの日本独特の道具がスギの割裂性（板にしやすさ）を生かして作られたことを指摘し、「日本が独自の木の文化を誇ってきたというなら、それは『スギの文化』であったからというべきであろう」と述べた。

小原も遠山も、日本の木の文化はスギ・ヒノキをはじめとする針葉樹が中心であったという理解が共通して見られる。この理解はスギ・ヒノキの人工林に親しんだ今日の我々の感覚にも合致する。

### 北海道の異質性

しかし、この理解を北海道に適用することはできない。北海道は、植生と歴史・文化の2点において本州以南と明確に区別されるからである。

#### 1) 植生

植生学によると、渡島半島を除く北海道は、それ以外の日本列島が属する東亜温帯と異なり汎針広混交林帯に区分される（舘脇 1955）。汎針広混交林帯にはシュミット線以南の樺太、南千島、満州東部、ソ連（現ロシア）極東部も含まれる（図1）。



図1 北海道周辺の植生区分（舘脇 1955）  
 A. 汎針広混交林帯 B. 東亜温帯  
 C. 針葉樹林帯 D. ステップ帯

また、本州以南に生育していて北海道に生育しない樹種も多い。広葉樹では、ケヤキは北海道には天然分布せず、ブナ、クリ、トチも南西部にしか自生しない。

#### 2) 歴史・文化

北海道と本州以南の縄文文化まではほぼ同じような歴史をたどるが、その後の展開が全く異なる。

本州以南では弥生時代から稲作が始まるが、同時期の北海道では稲作は行われず狩猟・漁撈・採集を中心とした縄文時代が始まる（北海道埋蔵文化財センター 2004）。その後、北海道では擦文文化期、オホーツク文化期、アイヌ文化期と本州以南とは異なる時代が明治時代まで続く（表1）。

表1 北海道の時代区分  
 （北海道埋蔵文化財センター 2004を改変）

本州の時代区分	年代(西暦)	北海道の時代区分
旧石器時代	B.C.25000 B.C.12000	旧石器時代
縄文時代	B.C.300	縄文時代
弥生時代		続縄文時代
古墳時代	A.D.400 A.D.600	
飛鳥時代		オホーツク文化期
奈良時代	A.D.800	
平安時代	A.D.1200	擦文文化期
鎌倉時代	A.D.1300	中世
室町時代	A.D.1600	
江戸時代	A.D.1900	近世
明治～平成		(近代・現代)

### 異文化としての北海道の木の文化

これまで、北海道は植生および歴史・文化において本州以南とは異なっていることを示した。北海道の特徴を理解したうえで、小原や遠山の言う「日本の木の文化」を再考してみたい。

彼らはスギ・ヒノキを「日本の木の文化」の象徴としたが、そもそも北海道にはスギ・ヒノキは自生していない。つまり、彼らが木の文化を語るときの「日本」には北海道は入っていないということになる。

現時点で同じ国であっても、北海道と本州以南では植生も歴史・文化も異なっている。ゆえに、特に開拓以前の北海道の木の文化を語る際には、この2つは分けて語られるべきである。

考古学者の藤本強（1988）の「日本列島の三つの文化」によると、一般に日本文化とされているのは本州・四国・九州で成立した稲作農耕文化である「中の文化」であり、それとは別に北海道を中心とする「北の文化」が存在する。

小原や遠山のいう「日本の木の文化」は藤本の言う「中の文化」に含まれるものである。一方、開拓以前における北海道の木の文化は「北の文化」に含まれるものであり、「日本の木の文化」とは異文化として考えられるべきである。

### 北海道－広葉樹多用の文化

それでは、開拓以前の北海道の木の文化はどのようなものだったのか。

「日本の木の文化」とされた本州以南の木の文化が針葉樹を重視することは述べた。北海道にもトドマツやアカエゾマツなどといった針葉樹が自生しており、現在もこれらは人工造林樹種として植栽されている。また、江戸時代でも和人は北海道の針葉樹を大量に伐採していた。17世紀末から道南のヒノキアスナロが濫伐され、松前藩は保護政策を余儀なくされた。その後は、エゾマツが脚光を浴び、トドマツとともに大量に伐採された（菊池 2003）。

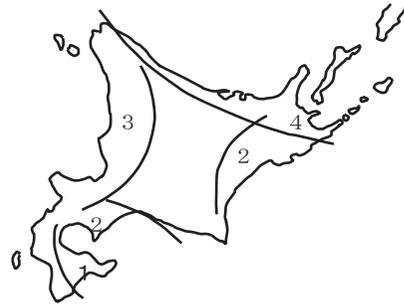
それでは、先住民であるアイヌ民族やその祖先もまた針葉樹を多用していたのか？木材を大量に消費する木造家屋を例に検証する。

三野紀雄（2001, 2002）は、北海道全域の縄文時代早期からアイヌ文化期に至る60遺跡から検出された竪穴住居の構造部材の樹種を属レベルで同定した。その結果、特定の地域で特定の樹種が2～3千年間にわたって住居の材料に選択的に利用されてきたことが分かった。

注目すべきなのは、建築材として選択的に利用されてきた樹種の多くが広葉樹であることである。胆振・釧路などの北海道中央部・東部地域の太平洋側ではコナラ節（ミズナラ・カシワなど）が、石狩などの中央部・東部地域の日本海側はトネリコ属（ヤチダモなど）が選択的に

利用されていた。また、渡島半島東部では、縄文時代にはクリ材が多用されたが、その後は、クリの使用量は減少した。

一方、モミ属（トドマツ）などの針葉樹材は、オホーツク文化期のオホーツク海沿岸地域では選択的に利用されていたが、それ以外の地域でほとんど使用されなかった（図2）。



1: 北海道南部地域	縄文文化 中期以前	縄文文化 中期	縄文文化 後期	続縄文文化
	?	→ クリ	→トネリコ属・クリ	→広葉樹雑多
2: 北海道中央部太平洋側	縄文文化中期以前	縄文文化中期・後期	擦文文化	
	トネリコ属	→ コナラ節・ハンノキ属	→コナラ節	
	ハンノキ属・ニレ属?	ニレ属		
3: 北海道中央日本海側	縄文文化中期以前	縄文文化中期・後期	擦文文化	
	トネリコ属?	→ トネリコ属	→ トネリコ属	
4: 北海道北部・東部地域オホーツク海沿岸	縄文文化早期	オホーツク文化・擦文文化		
	ヤナギ属・モミ属...	コナラ節・モミ属		

図2 竪穴住居に使用された樹種の地域別の変遷（三野 2001から、北海道博物館の許可を得て作成）

さらに、江戸時代や近代の記録によると、アイヌ住居の主要構造部の小屋組の用材は広葉樹小径木に限られていた（遠藤 1994）。つまり、前近代の北海道の木の文化は広葉樹多用の文化であり、「針葉樹文化」と称された「日本の木の文化」とは明らかに異なっている。

実は、考古学の出土木製品の調査から、本州以南においても、建築部材の主要部分に針葉樹が利用されるようになったのは弥生時代後半からであることが指摘されている。それ以前には本州以南でも「広葉樹利用の木の文化」が存在していた（鈴木 2012）。

つまり、広葉樹多用の文化はもともと日本列

島全体を覆っていたが、ある時期から本州以南では消失してしまい、北海道では何らかの理由で残存したと考えられる。

### 木の文化から今日の林業を考える

本稿では、開拓以前の北海道には広葉樹多用の文化が存在していたことを述べてきた。

だが、そのことが今日の林業においてどれだけ意識されているであろうか？現在、北海道林業の中心は、広葉樹ではなく、トドマツ・カラマツといった針葉樹の人工林施業である。カラマツは元々北海道には自生していない。トドマツは、先述したように、オホーツク文化期のような例外を除いて開拓以前の北海道において多用されることはなかった。

今日の北海道林業の活動は、ヒノキアスナロやエゾマツ・トドマツといった針葉樹を大量伐採した江戸時代の和人の忠実な後継者かもしれない。また、モミ属を多用したオホーツク文化期の木の文化との親和性も感じる。しかし、北海道の多くの地域で開拓以前から存在した広葉樹利用の木の文化が開拓以降の北海道林業に受け継がれることはなかったのではないかな？

本州以南ではどうだろうか？先述のように、今日の人工造林樹種であるスギ・ヒノキは弥生時代後期から使われていた。現在、これらの人工林の管理不足が問題になっている。その近因は、戦後の拡大造林と1965年からの木材貿易の自由化であるが、遠因はスギ・ヒノキを中心とする木の文化に求められるのではないだろうか。

つまり、本州以南では前近代からの針葉樹文化がその後の人工林施業に受け継がれている。それにもかかわらず、現在の北海道の人工林施業は開拓以前の木の文化をあまり反映していないように見える。

もちろん、開拓以前と今日とでは状況が全く異なるため、一概に今日の人工林の在り方を批判することはできない。

しかしながら、開拓以前の北海道では広葉樹の文化が残存していたという事実をもっと意識されていい。木の文化にみられる北海道の異質性を無視して本州以南と同じような森林管理を北海道で行うのは危険でさえある。「愚者は経

験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というヴィスマルクの警句もある。今後の北海道林業の在り方を考えるとき、開拓以来150年の短い経験のみを念頭に置き、縄文時代以来2000年間続いた北海道独自の木の文化を考慮しないのは非常にもったいないことである。

現在のような変革期こそ、あえて落ち着いて過去を眺め、歴史から教訓を得るべきではないだろうか。

**謝辞：**本稿は、北海道大学森林空間機能学演習で報告した内容の一部を加筆して作成した。その際に議論に加わってくださった教員や同期の皆様及び発表・執筆時にご教示を頂いた渡邊陽子研究員や守屋豊人助教をはじめとする教員諸氏に深く感謝する。

### 引用文献

- 遠藤明久 (1994) 北海道住宅史話 (上) 住まいの図書館出版局  
 菊地勇夫 (2003) 蝦夷島の開発と環境, 菊池勇夫編, 蝦夷島と北方世界, 吉川弘文館232-259  
 小原二郎 (1972) 木の文化, 鹿島研究所出版会  
 鈴木三男 (2012) 8章 出土木製品利用樹種の時代変遷, 伊藤隆夫・山田昌久編, 木の考古学, 海青社81-102  
 館脇 操 (1955) 汎針広混交林帯, 北方林業7:204-243  
 遠山富太郎 (1976) 杉のきた道 日本人の暮しを支えて, 中央公論社  
 藤本 強 (1988) もう二つの日本文化 北海道と南島の文化, 東京大学出版会  
 北海道埋蔵文化財センター (2004) 遺跡が語る北海道の歴史, 北海道埋蔵文化財センター  
 三野紀雄 (2001) 先史時代における木材利用(5)クリ材について, 北海道開拓記念館研究紀要29:37-50  
 三野紀雄 (2002) 北海道の先史時代におけるいわゆる里山の形成について(1): 住居材料としての樹木利用の地域的・時代的な差異, 北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要2, 187-201  
 湯本貴和 (2012) 7章 木材利用の民俗植物学-昭和30年代以前の屋久島・宮之浦集落を例として-, 木の考古学, 73-80